

(1) しごとをつくり、安心して働けるようにする

- ・18歳や22歳の就職先は、ブランド力のある就職先を望む。日本政策金融では、「創業」「開業」への支援システムがある。小城市で開業するための手厚いシステムづくりができないか。例えば案内所や冊子を作成したり、小城市で開業する利点を開業を考えている人にもっとアピールする。
- ・資料に創業企業1社あたり、平均3.7人の雇用を生むというデータがあるが、日本政策金融独自のアンケート結果より得たものである。
- ・ソーシャルビジネスの浸透により、「行政」から「民業」へ時代は変わってきている。このような取り組みに対する支援がこれからは必要ではないか。特に「介護」関係は、女性の開業が増えてきている。
- ・外の資金を持ってくるコネクターループ企業は佐賀の中にもある。海外に勝負できる。既存の事業に創業も加わる形が良い。(日本政策金融 古川氏)

- ・総合戦略が5年計画であれば、5年以内の短期間で新規の創業で成果を出すことは、期間が短いため、現実的には難しいのではないか。安定するまでに時間がかかる。まずは小城市のある既存の企業に支援を行う方が現実的ではないか。安定を考えれば既存の企業は5年、新規は10年から15年は時間がかかるのでは。小城市にお金があるなら既存も新規も同時進行で支援できると思うが、お金がないなら、儲かる企業を支援して軌道にのったあとに、次は新規の企業に力を入れていく方がよいやり方ではないか。まず、18歳や22歳の佐賀出身者が都会で働く理由は、何か考える必要がある。何を求めて都会に行くのか。よく耳にする声として企業側の悩みは、「採用する人がいない」というもの。しかし、世間一般でよく耳にするのは、「仕事がない」という声があり、相反するものである。この現状をどうにか解消することはできないか。(竹下氏)

- ・現状の農業は、儲けていないと後継者ができにくい現状がある。農業だけでなく、商業や流通など、他の分野またはその分野の専門家と協力して、仕事を増やせないか。自ら加工に手を出すのではなく、他分野と手を組みたい。(下村宣氏)

- ・下村さんのお話は、同世代で異分野の仲間がいないのでは。農業・製造業・広告業など横のつながりが大切。お金があれば異分野とつながることが容易であろうが、お金をかけずにアイデアを募れたらよいが。(畑中氏)

- ・就労環境が昔とは違う。昔はこの仕事をやりたいという気持ちが最優先で仕事を決めていたのでは。福祉分野も近年変わってきている。対価・給料に合わない仕事でも、どう担っていくのか、やり遂げていくのかを考えている。福祉業界も厳しいのが現状。この仕事をやってよかったと思ってもらえる環境づくりをしたい。(ワークピア 古川氏)

・労働者の立場から見れば、働きにくい社会になってきている。働くことを軸に安心社会にできればよいが。佐賀でもいろんな企業が働きやすい環境づくりを、行政の支援も必要だが、企業自身も自覚することが大切。(太田氏)

・来月、牛津高校の起業コースの生徒に県の職員が講演を行う。起業コース自体昔はなかった。学生時代に楽しい体験(チャレンジショップ等)ができればよい。チャレンジカップ(ビジネスコンペ)の若い人のやる気・希望を叶えることができればとてよい。(天本氏)

・現在就職活動をしているが、将来起業もしたい。都会の大手企業は、佐賀大学という地方の大学というだけで、説明会すら参加できないときもある。地元企業は説明会の回数が少ないのがネック。地元生徒と地元企業がリンクする場がもっとあればよいのでは。この時代で起業する際はネットがとても大切。ネットやプログラミング等の専門性を習う場が佐賀に少ない。(松瀬氏)

(2) 地方への新しいひとの流れをつくる

・自分が親だったら、子どもに佐賀に帰らせたいかという会話を職場でしてきた。農家の息子(長男)は、東京に出ている地方に帰ることが多いのでは。インターネットの普及により地方でも仕事がしやすい環境になってきている。既存の企業も地元で評価されていないものがまだまだあるのでは。(井原氏)

・若者はネットに対しての意識があるが、技術はあるが中年以降のネットに拒絶がある人をどうネットに取り組んでいただけるかが大切では。(角本氏)

(3) 若い世代の結婚・出産・子育ての希望をかなえる

・未就学児のおかあさんはよくスマホを使っていて、ネットワークがある。子育てママは仕事をしたいが育児もしたい。保育園にやって自分も働くのはハードルが高い。現在私が運営するNPO法人では、子どもも同伴で、月2、3万程度の賃金だが、働く時間を決めるのではなく、仕事自体に対して賃金を払っている。おかあさんたちの悩みで多いのは、家賃が高いこと。島根県のIターンの例では、東京より賃金は少ないが家賃等の支出が安く、野菜などももらえる環境があったり、生活することに困まらないまちもある。(石橋氏)